

編集室

* 昨年5月から編集特別幹事として会誌編集業務に就き、1年近い業務をこなしたことになる。最近ようやく慣れてきたところである一方で、(結果として)二足のわらじとなった和文論文誌編集委員長の任期はあと少しとなった。同じ学会であっても編集スタイルが大きく異なる会誌と論文誌の編集を同時に担当する経験は、誠に得難いものである。一方で、本来業務である教育研究とも相まって忙しいことは確かである。このため、学会事務局のそれぞれの編集担当の方やそれぞれの編集委員から次々に御連絡を頂くが、これらに迅速に対応しているとは言い難く、関係各位に御迷惑をかけているのは大変申し訳ない。この場を借りてお詫びする。

* いうまでもないことだが、論文誌は著者からの投稿論文を査読の上、掲載に値すると編集委員会が判断したものを順次掲載している。特集を企画することにより意図的に集めることはあるが、いつどのような論文が送られてくるか、また採択率はどの程度か、などを予想できない。また、各号の厚さ(電子化された最近ではなおさら意識しにくい)を均一にしなければならないという理由もそれほどはない。この結果、論文誌の厚さは号ごとに異なり、場合によっては重厚なボリュームになることもあるし、あるいは掲載論文なしという事態もあり得る。号が欠けることなく読者たる会員により有意義な媒体となるよう、自ら光り輝く玉だけでなく磨けば光る玉となりそうな論文を、積極的に採録・掲載する必要がある。

* 一方、会誌ではまず掲載記事の企画から始まり、執筆可能な方を探し、原則として書き終えた記事から順次掲載となる。ただし、各号の厚さはおおむね決まっているし、様々な分野の記事をバランス良く掲載する必要もあるので、場合によっては掲載が遅れる場合もある。会員全員を対象とする会誌はトピックを適時的確に取り上げるものの、論文誌ほどの当該技術領域への先鋭さは必ずしも必須ではない。むしろ、信頼性をもって当該技術領域の内容を伝えており、会員の知識を広げかつ深めることが主要な目的である。

* 両者共に、発行を支えるために多くの人手を費やして

いることはいうまでもない。特に査読委員や編集委員はボランティアである。学術系商業誌との競争下にあるこれらの媒体は、個々の会員の多大なる貢献で支えられている。商業誌による良質かつホットな学術情報の世界中への迅速な情報発信など、本会出版物も見習うべき点も多いとは思いますが、一方で、当該学術・技術領域の健全な発展は経済性だけでは評価できないため、この発展を先導することこそ学術団体の使命であるともいえる。特に、会員諸氏は読み手であると同時に書き手であり、編集の担い手でもある点が特徴的である。このため、会誌・論文誌はこれを生かす媒体であり続けなければならない(すなわち、生かす媒体であり続けるよう書き手・編集の担い手である会員が努めなければならない)し、かつ、著者・読者である会員はこの特徴を生かせるように利用しなければならない。そのためにも、会員並びに社会に対して、特に会誌は説明責任を果たさなければならないことはいうまでもない。本会が担う電子情報通信技術の発展と普及自身が、個人による情報収集・発信を格段に容易にしている現在、人的・時間的・経済的コストをかけて出版する会誌の意義はこれである、と胸を張って全会員が主張できる状況を目指したいものである。

* さて、本号が会員諸氏のお手元に届く3月上旬は、各地から春の便り(沖縄からは初夏の便りであろうか)が届き始めるころであろうか。春の便りの中に桜(ソメイヨシノ)の開花予想と開花宣言があるが、気象庁は今年からは開花予想を行わない。既に複数の民間業者が開花予想を実施しているので、公が実施する理由が薄れた、ことが理由だそう。春の雰囲気を伝え、太陽の恵みを感じる桜前線の北上が、今年は一味異なって感じるだろうか。

* そんな太陽の恵みを感じる別の機会が、本号小特集では太陽エネルギー発電に絞って取り上げた太陽エネルギーの利用である。季節の移り変わりと太陽の恵みを感じるために、たまには屋外(例えば中旬に仙台で開催される総合大会の会場などいかがだろうか)で本誌を読んでもみるのもよいかもしれない。

(編集特別幹事 牧野光則)